

〔科目名〕 文学と人間	〔単位数〕 2 単位	〔科目区分〕 教養科目
〔担当者〕 横手 一彦	〔オフィス・アワー〕 時間:講義開始後に指示 場所:616 研究室	〔授業の方法〕 講義
〔科目の概要〕 この講義は、次の二つを軸に展開する。 一つは、日本近代文学を概観し、その特徴を見出すことである。作品を読み直し、時代との関わりや情知の形成過程を考え、その動態を分析する。 その過程から、現代に関わる素因を考察することを目的とする。個人の構想力(想像力)は、近代化(欧米化)の過程に随伴し、そこに範を置きながらも、多様な人間、様々な思考、錯綜した行動を描いた。 それらは、必ずしも道徳的な尺度や倫理的な基準に拠らず、むしろ、そこからこぼれ落ちる要因に関心を向けた。明治という時代の特異性や、明治という時代に生きた作家夏目漱石を、主な考察対象とする。 もう一つは、北東北の地域性を視野に入れ、個別の文学作品や映像作品を考察することである。 新田次郎『八甲田山死の彷徨』と映画「八甲田山」と八甲田、水上勉『飢餓海峡』と映画「飢餓海峡」と下北半島、松本清張『砂の器』と映画「砂の器」(——必見に値する映画作品)と津軽半島などのテーマを設定する。 また、太宰治『津軽』を部分的に取り上げたい(あるいは津軽三味線の仁太坊)。地に根差し、北東北の現実を生きた人間の記録を、異なった表現形式を組み合わせることで考察する。 ことばによる理解と表現。映像による理解と表現。それらが重複する領域を焦点化し、いまの私たちが立つ地点の考察に及びたい。		
〔「授業科目群」・他の科目との関連付け〕・「なぜ、学ぶ必要があるか・学んだことが、何に結びつくか」 私たちは、学び、考える主体としてある。行動し、時には個人的な、社会的な批判を受ける。あるいは、評価される。現代では、その主体性という考えを否定する見方もある。 しかし〈自分〉が基点であり、〈自分〉を起点とすることに変わらない。その要は、ことばによる「理解」と「表現」である。ことばによって、「理解」し「表現」することの意味を考える。私たちが立っている、この現代という時空間を考え直すため、近代という連続性を再検討する。そして、新たな全体像を、個の側から再構想することを試みる。 その未達と到達、それぞれの過程、変化や変容などを、文字表現の分析から読み解く。文字は、その生成時から、全く人間的なものであり、そこに特定の文化性が自ずと生み出された。 〈自分〉の在り方は、生きている〈自分〉の現実に関わる。そのような在り方や、そこに派生する疑問を、個別作品を分析しながら、教場で考えたい。 そのような課題設定は、他科目を学ぶ〈自分〉の在り方や関わり方というものに、自ずと広がると考える。 ※時間割表に、同一科目名「文学と人間」が二つ配置されている。より適切な受講者数で、教室での個々の応答を大切にしたいという主意による。同一科目名の二つを受講することはできない。時間割を勘案し、各自の判断で、どちらかの時間帯を選択する。		
〔科目の到達目標(最終目標・中間目標)〕 中間目標： この講義は、教養教育科目の一つである。文学作品を紹介し、作品本文を分析し、書かれた内容を理解し、解釈する。これまでの「国語」教科とは異なる〈ことばを学ぶ〉パターンに触れ、幾つかの要点を習得することで、〈自分〉が〈自分〉を考え、〈自分〉が〈自分〉のことばで、「理解」し「表現」する大切さに及ぶ。 最終目標： そのような人文科学領域における実践から、特定の課題を解決する能力(ことばによる対象化にはじまる「理解」と「表現」の過程)の獲得を最終的な目標とする。		

〔学生の「授業評価」に基づくコメント・改善・工夫〕 新規開講6年目である。学生の積極的な提案に真摯に向き合いたい。 しかし、要望の総てに応えることは出来ないし、要望の総てが〈学ぶ〉ということに根拠を持つとも限らない。学生の不満や批判があろうとも、〈学ぶ〉ことに根拠を持たないと思われる要望には応じられない。 昨年と同様に、対話型の講義を基本に進行する。受講生の関心を勘案し、また要望により、昨年度より視覚教材を多く取り入れた授業計画とした。	
〔教科書〕 特に指定しない。	
〔指定図書〕 特定の書籍を指定しない。講義中に配布した資料や文書の通読を求める。また、必要な文献等を紹介する。	
〔参考書〕 講義の進展に伴い、適書を指示する。また、参考文献を紹介する。	
〔前提科目〕 なし。	
〔学修の課題、評価の方法〕(テスト、レポート等) 日本の近代化の諸相を、近代文学の作品が、どのような行為として描いたか。この変化の概略を理解し、併せて北東北の地域的な特性について理解を深める。 ことばや映像の表現形式を具体的に考察することを通じ、現在の様態を分析的に把握し、批判的に「理解」し、〈自分〉の「表現」能力を高める、その到達度によって評価する。	
〔評価の基準及びスケール〕 講義への積極的な関わりなど(20%)、小テストや小レポート(20%)、学期末テスト(60%)。 A=100-80点 B=79-70点 C=69-60点 D=59-50点 F=49-0点	
〔教員としてこの授業に取り組む姿勢と学生への要望〕 この講義は、いくつかの段階を踏まえて進行する。このため、一側面において、雑多との思いを抱くかもしれない。 講義の進行は、はじめに、前回の学生コメント紹介、復習、作品紹介、分析し考察し思考する、要点確認、質問の項目立てに沿ったものである。 関連する事柄を事前学習し、挙手や質問シートに書き込むなど、積極的な姿勢で、講義内容に取り組むことを望む。	
〔実務経歴〕 なし。	
授業スケジュール	
第1回	テーマ（何を学ぶか）： 講義への導入 「文学」を学ぶということ 内 容：はじめに——自己紹介・受講要件の確認・受講態度等・講義の概略・学生の要望 ：講義の導入1（例. ことばの基本形 国語と母語）中校生の手紙 西行 ：講義の導入2 身近なところから考える(例. 八甲田山)

	教科書・指定図書： 都度、適書を紹介し、講義の進行に合わせて参考資料などを配布する。
第2回	テーマ（何を学ぶか）： 日本の近代文学 内 容：坪内逍遙「小説神髓」の位置 近世からの転倒(あるいは進展) 初期理論の確立 ：明治という時代 教科書・指定図書： 同上
第3回	テーマ（何を学ぶか）： 明治という時代1 内 容：西洋の受容——英文学者夏目金之助と作家夏目漱石 公私に生きる 〈私〉に生きる 教科書・指定図書： 同上
第4回	テーマ（何を学ぶか）： 明治という時代2 内 容：西洋の受容——夏目漱石「坊ちゃん」 学校教育制度 立志 制度と個の衝突 人を育てる 教科書・指定図書： 同上
第5回	テーマ（何を学ぶか）： 明治期の折り返し・明治という時代3 内 容：講義の前半に立ち返る／講義の到達点と未達点／講義中に小レポート作成 展開の諸相——森鷗外「舞姫」 新帰朝者 外側と内側の相克 学ぶ力 〈公〉に生きる 教科書・指定図書： 同上
第6回	テーマ（何を学ぶか）： 明治という時代4 内 容：展開の諸相——例えば樋口一葉、与謝野晶子、山川登美子、文学への情熱 女性として、≦ 人として、生き方と作家生活 教科書・指定図書： 同上
第7回	テーマ（何を学ぶか）： 地域性から考える——太宰治 / 仁太坊(津軽三味線) 内 容：地域との関わり 例えば——太宰治『津軽』 太宰治と津軽 津島修治 / 仁太坊(津軽三味線) 教科書・指定図書： 同上
第8回	テーマ（何を学ぶか）： 地域から考える——北東北の文学作品と映像作品 1 内 容：地域との関わり——北東北の地域性 北東北の地に生きる 北東北の生活を描く 例えば——水上勉『飢餓海峡』と映画「飢餓海峡」と下北半島 その1 教科書・指定図書： 同上
第9回	テーマ（何を学ぶか）： 地域から考える——北東北の文学作品と映像作品 2 内 容：地域との関わり——北東北の地域性 北東北の地に生きる 北東北の生活を描く ：例えば——水上勉『飢餓海峡』と映画「飢餓海峡」と下北半島 その2 教科書・指定図書： 同上
第10回	テーマ（何を学ぶか）： 地域から考える——北東北の文学作品と映像作品 3 内 容：地域との関わり——北東北の地域性 北東北の地に生きる 北東北の生活を描く 例えば——松本清張『砂の器』と映画「砂の器」と津軽半島 その1

	教科書・指定図書： 同上
第11回	テーマ（何を学ぶか）： 地域から考える——北東北の文学作品と映像作品 4 内 容：地域との関わり——北東北の地域性 北東北の地に生きる 北東北の生活を描く ：例えば——松本清張『砂の器』と映画「砂の器」と津軽半島 その2 教科書・指定図書： 同上
第12回	テーマ（何を学ぶか）： 地域から考える——北東北の文学作品と映像作品 5 内 容：地域との関わり——北東北の地域性 北東北の地に生きる 北東北の生活を描く ：新田次郎『八甲田山 死の彷徨』の成立 映画「八甲田山」製作 その1 教科書・指定図書： 同上
第13回	テーマ（何を学ぶか）： 地域から考える——北東北の文学作品と映像作品 6 内 容：地域との関わり——北東北の地域性 北東北の地に生きる 北東北の生活を描く ：新田次郎『八甲田山 死の彷徨』の分析 その2 ：映画「八甲田山」と脚本家橋本忍 教科書・指定図書： 同上
第14回	テーマ（何を学ぶか）： 地域から考える——北東北の文学作品と映像作品 7 内 容：地域との関わり——北東北の地域性 北東北の地に生きる 北東北の生活を描く ：新田次郎『八甲田山 死の彷徨』まとめ その3 ：映画「八甲田山」という映像作品 教科書・指定図書： 同上
第15回	テーマ（何を学ぶか）： まとめ 内 容：通史と通論という思考 話す・聞く・読む・書く 文字化するという行為 ことばによる「理解」 ことばによる「表現」 人間的な行為（人である・人になる・人となる） 教科書・指定図書： 同上
試 験	期末試験実施(受講者数やその関心の在り方などから、期末レポート提出とすることもある・教場で指示)。 講義を15回実施する前提で授業計画を作成した。しかし他の科目と同じく、12回実施となることもある。その場合、課題レポートの提出を求めたりする。